

## 『源氏物語』野分巻の垣間見再考―垣間見る

夕霧の行動と心情から見える新たな役割―

樋本 めぐみ

―はじめに

「垣間見」は、「物の隙間からこっそり覗き見をする  
こと。「かいばみ」とも。」（秋山虔編『王朝語辞典』担当保  
戸塚朝）と解されている。これは、必ずしも「垣間」から  
「見」ることを指すわけではない。このことについて、  
吉海直人は、次のように述べている。

たとえば、垣間見の初出と考えられている『竹取物  
語』では、「垣間」ではなく「穴をくじり、かいば見」  
しようとしていた。（中略）その他、「格子のはさま」  
や「御簾の隙」「屏風の隙」などの例も少なくない。  
また薫はしばしば「障子の穴」から垣間見ている。（中  
略）要するに、（広義）の垣間見は、「垣間」以外から  
見る例も許容されているというわけである。①

垣間見の用例は、「垣間」以外の「穴」「はさま」「隙」な

どの隙間や、物陰から見ているものも含むようになって  
いるのである。

また、今井源衛は、垣間見を物語構成上の一手法と位  
置付け、平安朝の物語文学に表れるほとんどの垣間見が、

①後の物語の展開の上に、これが因となって自ら重大  
な影響を与えていく。

②恋愛等の発生ないし展開の上に、きわめて自然なし  
かも有効な契機である。

ということを指摘している②。このような理解に基づい  
て議論は展開し、現在の垣間見論の基礎をなしている  
といてよい。垣間見は、平安朝の物語文学の中で、物語  
を新たに展開させる発端としての意味を持ち、密通や恋  
物語展開に結び付くと位置づけられているのである。

『源氏物語』にもまた、垣間見場面が数多く存在し、  
その一つに、野分巻における夕霧の垣間見場面がある。

『源氏物語』における主要人物の一人である夕霧が、野  
分の訪れた六条院で、紫の上、玉鬘、明石の姫君を次々  
と垣間見る場面であるが、この垣間見は、恋物語展開や  
密通に繋がるものにはなっていない。垣間見論の基礎  
である「恋愛等の発生ないし展開の上に、きわめて自然  
なしかも有効な契機」になっていないのならば、野分巻  
の夕霧の垣間見場面はどのような役割を有しているのだ

ろうか。この垣間見場面について興味・関心を抱き、本研究で取り上げるに至った。

本稿では、『源氏物語』野分巻の夕霧の垣間見場面を、それぞれの女君ごとに、特に夕霧の「見る」という行為と、それに関係した現象、あるいは夕霧の行動や心情に焦点を当てて考察する。そこから、この垣間見場面における夕霧の役割や、野分巻の夕霧の垣間見全体の役割を見出していく。

## 二 紫の上の垣間見

### 二・一 夕霧の行動

紫の上垣間見場面は、野分に荒らされる庭を見つめる紫の上の姿から始まる。

折れ返り、露もとまるじく吹き散らすを、すこし端近くて見たまふ。大臣は、姫君の御方におはしますほどに、中將の君参りたまひて、東の渡殿の小障子の上より、妻戸の開きたる隙を何心もなく見入れたまへるに、女房のあまた見ゆれば、立ちとまりて音もせで見ると。御屏風も、風のいたく吹きければ、押したたみ寄せたるに、見通しあらはなる庇の御座にあたまへる人、ものに紛るべくもあらず、気高くきよらに、さとにほふ心地して、春の曙の霞の間より、

おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地す。

(③二六四〜二六五頁) ③

紫の上の美しさは、夕霧の目を通して、春の霞の間から見事な樺桜が咲き乱れているのを見るようだと言容される。その容貌は紛れようもなく、他の女房とも比較にならず、夕霧の視線を捉えて離さない。

大臣のいとけ遠くはるかにもてなしたまへるは、かく、見る人ただにはえ思ふまじき御ありさまを、至り深き御心にて、もしかかることもやと思すなりけりと思ふに、けはひ恐ろしうて、立ち去るにぞ西の御方より、内の御障子ひき開けて渡りたまふ。

(③二六五〜二六六頁)

夕霧は実際に紫の上を見ることで、源氏がなぜ自分と紫の上を遠ざけていたのかに気付き、恐ろしくなつて立ち去ろうとする。ちょうどその時、源氏が西の明石の姫君のもとから戻ってくる。

「いとうたて、あわたたしき風なめり。御格子おるしてよ。男どもあるらむを、あらはにもこそあれ」と聞こえたまふを、また寄りて見れば、もの聞こえて、大臣もほほ笑みて、見たてまつりたまふ。親ともおほえず、若くきよげになまめきて、いみじき御容貌の盛りなり。女もねびととのひ、飽かぬことな

き御さまどもなるを身にしむばかりおぼゆれど、この渡殿の格子も吹き放ちて、立てる所のあらはになれば、恐ろしうて立ち退きぬ。(③二六五―二六六頁)

他の男の目を気にした源氏の声を聞き、夕霧は再び寄つてのぞいてみる。源氏の注意にもかかわらず、格子はすぐには下ろされず、夕霧は紫の上と源氏の姿を垣間見ることとなる。夕霧は、今が盛りと思われるほど若々しく美しい源氏と、共にいる紫の上の姿を、身内という立場から離れて称賛している。渡殿の格子が吹き上げられて、立っている所が丸見えになってしまったので、見つかることを恐れて立ち退いた。

その後、夕霧は源氏の元に参上し、そこで源氏は「さればよ、あらはなりつらむ、とて、かの妻戸の開きたりけるをよ」とはじめて気にしている。一方夕霧は、野分のおかげで紫の上の姿を見ることができたと嬉しく思うのであった。こうして、夕霧の紫の上の垣間見は終わりを告げる。

## 二・二 垣間見を誘引するもの「野分」

夕霧の行動を追っていくと、野分の存在が非常に重要であることがわかる。なぜならば、夕霧の垣間見を容易にしている要素は、

・ 風見舞のために夕霧が六条院に行く。

・ 秋の草花を心配した紫の上が端近に出てきている。

・ 屏風がたたみ寄せてあり、見通しがよくなっている。の三点に集約され、これらは全て野分を原因としているからである。蜃巻に「中将の君を、こなたにはけ遠くもてなしきこえたまへけれど」(③二一六頁)、また「台盤所の女房の中はゆるしたまはず」(③二一七頁)とあり、源氏は自分と藤壺との過ちを鑑みて、夕霧が紫の上、ひいては紫の上付きの女房に近づかないよう、細心の注意を払っている。このことが原因で、夕霧は野分巻に至るまで、自力で紫の上の姿を見ることはかなわなかった。そして、この野分巻の垣間見も、「何心もなく見入」っただけで、見ようという意思を持ち、自ら行動したわけではないのである。野分を原因とした現象が重なり合って、夕霧は紫の上を垣間見ることができた。それはすなわち、紫の上を垣間見る夕霧の視点は、野分によって生み出されたものだということになる。

ここで、野分巻における野分の存在について考えてみる。野分巻は、六条院に訪れた秋を秋好中宮の庭に見る場面から始まる。秋好中宮の庭は例年以上に見る価値のあるところが多く、花の枝ぶり、様子、朝露、夕露の光までも格別に美しく、造り成された野辺の景色は見る人々の心を浮き立たせるほどであると描写されている。

秋好中宮はこの景色に魅せられて里居しているのだが、この秋の盛りは「八月は故前坊の御忌月なれば」とあり、父が亡くなった月であるため、管絃の遊びなどを行うことができない。花の盛りが過ぎてしまうことを危惧しつつ、花の色が徐々に美しくなっていく様子を見ている秋好中宮の前で、野分が例年よりも激しく吹き荒れる。

もともと、秋好中宮が四季の中から秋を選択したのは、母六条御息所の亡くなった季節だからであった。六条院の秋の町に住んでいることに加え、父母の亡くなった季節が秋という点からも、六条院世界の中で最も秋と縁深いのは秋好中宮であろう。ゆえに、野分巻で冒頭の舞台がまず秋の町に設定され、秋好中宮が秋の庭を見、その視点を通して六条院の秋が表現されていくのは当然のことと言える。しかし、秋好中宮はその立場に反して、野分によって崩壊していく六条院の自然を最後まで見ることはない。

花どものしをるるを、いとさしも思ひしまぬ人だに、  
あなわりなど思ひ騒がるるを、まして草むらの露の  
玉の緒乱るるままに、御心まどひもしぬべく思した  
り。覆ふばかりの袖は、秋の空にしもこそ欲しげな  
りけれ。暮れゆくままに、物も見えず吹き迷はして、  
いとむくつけければ、御格子など参りぬるに、うし

ろめたくいみじと花の上を思し嘆く。(③二六四頁)  
とあるように、野分の登場が原因で、秋好中宮の視覚は遮断されてしまうのである。後に、夕霧が源氏の使者として秋好中宮を見舞う場面がある。

東の対の南のそばに立ちて、御前の方を見やりたれば、御格子二間ばかり上げて、ほのかなる朝ぼらけのほどに、御簾捲き上げて人々ゐたり。高蘭に押しかかりつつ、若やかなるかぎりあまた見ゆ。うちとけたるはいかがあらむ、さやかならぬ明けぐれのほど、いろいろなる姿はいづれともなくをかし。東の童べ下ろさせたまひて、虫の籠どもに露かはせたまふなりけり。紫苑、撫子、濃き薄き相どもに、女郎花の汗衫などやうの、時にあひたるさまにて、四五人連れて、ここかしこの草むらによりて、いろいろの籠どもを持ちてさまよひ、撫子などのいとあはれげなる枝ども取りもてまゐる、霧のまよひは、いと艶にぞ見えける。(③二七三頁)

野分の去った翌日で、しかも昨日最後まで映すことのできなかつた秋の庭であるにも関わらず、野分によって荒らされた風景は一切描かれていない。主人である秋好中宮の視点が、野分によって奪われてしまったために、秋の庭ではその美しさのみが描写され、崩壊しているはず

の秋の草花を見ることはできないのである。秋好中宮の野分に対する視点が、閉ざされたままであることがわかる。

当初、その美しさを伝えるために秋の庭を見るという視点人物の役割を与えられた秋好中宮だが、その視点は野分が奪い取っていく。高橋亭は秋好中宮について、「六条院の本来的な女主人は紫上ではなく秋好中宮であった。六条御息所の鎮魂のために、御息所の旧邸跡に造営されたからである」④と述べている。秋好中宮が六条院の本来的な女主人である点を考慮すると、野分の襲来は六条院の支配、あるいは管理の体制の崩壊を示唆していると思われることができる。

冒頭の場面に続く台風襲来の様子は、秋好中宮が御格子を下ろされ、庭がどうなってしまうのか気がかりに思い、嘆いているところで場面が切り替わる。そして、失われた秋好中宮の視点は紫の上が譲り受けることとなる。秋好中宮の視界に入ることのなかった、荒々しい野分とそれに襲撃される秋の草花は、紫の上の視界に捉えられ、それが夕霧の視点を生み出す。野分の登場の後、秋好中宮の目は閉ざされたまま、物語は六条院を描写する別の視点を得て進行していく。

野分によって生み出され、さらに野分を原因とした現

象に支えられて紫の上を垣間見ているという点から、この垣間見場面における夕霧の視点は、六条院の秩序を脅かすものとして、位置付けられているといえよう。

### 二・三 垣間見を中断するもの「源氏」

紫の上の垣間見には野分だけでなく、源氏も大きな影響を与えている。この垣間見は、まず、

大臣のいとけ遠くはるかにもてなしたまへるは、かく、見る人ただにはえ思ふまじき御ありさまを、至り深き御心にて、もしかかることもやと思すなりけりと思ふに、けはひ恐ろしうて、立ち去るにぞ西の御方より、内の御障子ひき開けて渡りたまふ。

(③二六五〜二六六頁)

とあり、一度中断している。その後、夕霧は紫の上に源氏を加え二人の姿を垣間見る。そして、

女もねびととのひ、飽かぬことなき御さまどもなるを身にしむばかりおぼゆれど、この渡殿の格子も吹き放ちて、立てる所のあらはになれば、恐ろしうて  
立ち退きぬ。

(③二六六頁)

とあり、自分のいる場所が野分によって露わになり、垣間見していることを源氏に見つかる可能性に思い至り、今度こそ立ち去るのである。これらの記述から、夕霧が紫の上の垣間見を中断するのは、源氏の存在を想起、あ

るいは意識した時であるということがわかる。その姿が視覚的に捉えられていない時でさえも、夕霧に「恐ろし」という感情を抱かせ、垣間見を中絶するという行動の発端となっているのが、源氏の存在なのである。

源氏については、夕霧の紫の上垣間見の後の行動や心情と関連付けて考えていく。紫の上の容姿を垣間見たために、夕霧はその時抱いた印象に翻弄され、思い悩むこととなる。夕霧は、紫の上の垣間見から、再び紫の上らしき人物を垣間見るまでに、三条宮の尼君のもとや花散里のもとを訪ね、風見舞の世話をする。そこには、夕霧の「まめ人」⑥という人柄が実によく表れているのだが、同時に心乱れている夕霧の心情も描かれているために、夕霧の情け深い面というよりはむしろ、「まめ人」に影が差していることの方が、強い印象を与えるだろう。三条宮では、

中將、世もすがら荒き風の音にも、すずろにもおはれなり。心にかけて恋しと思ふ人の御事はさしおかれて、ありつる御面影の忘れられぬを、こはいかにおぼゆる心ぞ、あるまじき思ひもこそ添へ、いと恐ろしきこと、とみづから思ひ紛はし、他事に思ひ移れど、なほふとおぼえつつ、来し方行く末ありがたくもものしたまひけるかな、かかる御仲らひに、

いかで東の御方、さるものの数にて立ち並びたまへらむ、たとへしなかりけりや、あないとほし、とおぼゆ。大臣の御心ばへをありがたしと思ひ知りたまふ。  
(⑥二六九頁)

とあり、紫の上のことを思いながら野分の夜を過ごす、夕霧の姿がある。雲居雁のことを差し置いて、紫の上のことを考えてしまう自分の心を、「いと恐ろしきこと」とし、自分で気を紛らわし、他のことに考えを移しているのだが、それでもやはり、紫の上のことを思い出してしまうのである。夕霧の自制心は、紫の上の前に、意味を成していない。そして、夕霧は垣間見た紫の上と源氏の姿から、あまり器量の優れていない花散里を庇護する父源氏の気性をめつたにないことだと感心する。かくして、紫の上の垣間見は、源氏への称賛へと繋がっていったのである。

花散里のもとを訪れ、野分の被害の修繕を申しつけた後、夕霧は南の町に参上する。そして、閨から漏れてくる源氏と紫の上の睦言を「ゆるびなき御仲らひかな」と感じ取っている。源氏が自ら格子を上げ出てくると、夕霧はあまりに近くにいたことをきまり悪く思う。伊藤博が「これによってもいかに夕霧が禁じられた情念に憑かれながら、父夫妻の気配を全身的に触知しようとしてい

たかが察せられよう」③としていているように、夕霧は二人の様子を察知することに夢中になつていているのだが、それは源氏の行動によって中断させられるのである。

野分襲来の翌朝、夕霧は源氏の名代として秋好中宮を見舞い、南の町に復命してゐる時に、紫の上と思われる女性を垣間見する。

御直衣など奉るとて、御簾ひき上げて入りたまふに、短き御几帳ひき寄せて、はつかに見ゆる御袖口は、さにこそはあらめと思ふに、胸つぶつぶと鳴る心地するもうたてあれば、外さまに見やりつ。(中略) 出でたまふに、中将ながめ入りて、とみにもおどろくまじき気色にてゐたまへるを、心鋭き人の御目にはいかが見たまひけむ、たち返り、女君に、「昨日、風の紛れに、中将は見たてまつりやしてけむ。かの戸の開きたりによ」とのたまへば、面うち赤みて、「いかでかさばあらむ。渡殿の方に、人の音もせざりしものを」と聞こえたまふ。「なほあやし」と独りごちて渡りたまひぬ。(③二七五〜二七六頁)

この場面は、紫の上の容姿などは一切描写されておらず、「はつかに見ゆる御袖口」としか書かれていないのだが、「さにこそはあらめ」とあり、夕霧は紫の上に違いないと確信して見ているので、この場面も、夕霧の紫の上の

垣間見場面と位置付けておく。

ここでの夕霧は、ほんの少し見えた紫の上の袖口に胸が高鳴り、注意が散漫になつてしまつてゐる。そのため、源氏が御簾の外に出てきているのにもかかわらず、すっかり物思いに沈んでおり、すぐには気付かない。一方、源氏はその様子を見て、夕霧の心中を素早く察知する。「心鋭き人」と表現されているように、夕霧の態度から、すぐに紫の上を見られてしまつたかもしれないと思つたつてゐるのだ。源氏が出てきているのに気付かない夕霧の姿と、細かな変化にもすぐに気付く源氏の姿が、対照的に描かれてゐると見ることが出来る。自分と紫の上の世界に夕霧が踏み込んでしまつた可能性を考え、警戒してゐる源氏は、鋭い洞察力を發揮することで、六条院を管理、支配する者、つまり六条院の主人という面をまだ維持してゐるのである。

これらの記述から、紫の上に関する夕霧の行動あるいは思考が、源氏の存在によつて、ことごとく断たれていくことがわかる。野分の力を借りて、紫の上を見ていた夕霧の視点は、野分によつて奪われた秋好中宮の視点のように、源氏が摘み取つてしまつてゐる。紫の上への想いは、源氏に対する尊敬へと形を変え、近くによつて睦言を聞くという行為も、源氏によつて遮断される。さら

に、野分によつて「見る人」という立場を獲得している夕霧の姿を、鋭い眼差しの中に捉えており、野分は源氏の視点は奪うことができていないのだとわかる。これらの点から、紫の上の垣間見における源氏は、夕霧、また夕霧に視点を与えている野分にも勝る力を持っている存在であると捉えることができる。

## 二・四 夕霧の役割

夕霧の紫の上の垣間見場面について、『新編日本古典文学全集』では、

源氏は、自分と紫の上との世界を禁域として、わが子夕霧の接近をも警戒する。にもかかわらず、源氏の知らぬところで十五歳の青年夕霧の目はこれをしただたかに見すえて、自主的に行動しはじめている。

(③二六七頁)

と位置付けるが、果たしてそうだろうか。紫の上と源氏の姿を見た後の「年ころかかることのつゆなかりけるを、風こそげに巖も吹き上げつべきものなりけれ、さばかりの御心どもを騒がして、めづらしくうれしき目を見つるかな、とおぼゆ。」(②二六六〜二六七頁)という一文が表しているように、夕霧の垣間見は野分を原因とする様々な現象が重なり合つて成立しているのであり、夕霧もそのことを自覚しているのである。さらに、この垣間

見には野分だけではなく、源氏の存在も大きな影響を及ぼしている。それは野分をも凌ぐ存在として夕霧の行動に介入してくる。

野分によつて支えられ、源氏によつて閉じられる、夕霧の「見る」という行為、また源氏の存在の想起や意識から生まれている「立ち去る」、あるいは「立ち退く」という行動は、この時点で、夕霧が六条院世界での自主性を持ち合わせていないことを表しているのではないだろうか。自らの行動を律することのできない夕霧の姿が、野分と源氏という二つの存在によつて描き出されている。換言すると、この紫の上の垣間見場面での夕霧の姿は、野分と源氏の存在、とりわけ後者の大きさを表現しているということになる。

## 三 玉鬘、明石の姫君の垣間見

### 三・一 野分と源氏の存在

紫の上の垣間見場面で、夕霧の行動に大きな影響を及ぼしていた野分と源氏が、玉鬘、明石の姫君の垣間見場面では、どのように扱われているのかを見ていく。

まず、玉鬘の垣間見場面である。野分の吹き荒れた翌日、源氏は秋好中宮、明石の君の元を訪れた後、玉鬘を訪問する。夕霧は源氏の風見舞に随伴し、そこで玉鬘の



姿を垣間見ることとなる。

中将、いとこまやかに聞こえたまふを、いかでこの御容貌見てしがなと思ひわたる心にて、隅の間の御簾の、几帳は添ひながらしどけなきを、やをら引き上げて見るに、紛るる物どもも取りやりたれば、いとよく見ゆ。(③二七八〜二七九頁)

この玉鬘の垣間見は夕霧が、きちんとしていない几帳の添えられた御簾を、静かに引き上げることと始まる。この垣間見が始まる前に、玉鬘のいる東の御殿の西の対は、「屏風などもみなたたみ寄せ、物しどけなくしなしたる」(③二七八頁)と描写されている。紫の上の垣間見場面では、「御屏風も、風のいたく吹きければ、押したたみ寄せたるに」(二六四〜二六五頁)とあることから、この場面で屏風などがたたみ寄せられていたのも、野分のためであると考えられる。つまり、この時点で夕霧の視界を遮る物は「しどけなき」几帳と御簾だけなのである。そして夕霧はその御簾を自ら「引き上げ」る。紫の上を垣間見たときは、「何心もなく」見たのだが、ここでの夕霧は、見たいと思つて見るのである。野分から視点を獲得し、野分によって環境が整えられ、何気なく隙間を覗き込むだけで成立していた紫の上の垣間見場面とは異なり、夕霧は自ら視点を作り出し、見るために行動を起こしてい

るのである。

源氏の存在については、「見やつけたまはむと恐ろしけれど、あやしき心もおどろきて、なほ見れば」(二七九頁)という叙述があり、夕霧は玉鬘の垣間見場面でも、紫の上の垣間見場面と同様、源氏に発見されることを「恐ろし」と感じていることがわかる。しかし、それは、玉鬘の垣間見場面の中断には繋がっていない。夕霧は「なほ見れば」とあるように、源氏に対する恐怖を抱えているが、それでもなお見続けてしまうのである。紫の上の垣間見場面では、視覚的に存在していない時でさえも、夕霧に「恐ろし」という思いを抱かせ、さらに夕霧の行動を中断させるほどの力を持つていた源氏のだが、ここでは、「恐ろし」という感情が生まれ、さらに冒頭からその存在が夕霧の目に入っているにも関わらず、夕霧の垣間見を止めることはできていないのである。

次に、明石の姫君の垣間見場面について見ていく。夕霧は、方々の女君を訪問した後、明石姫君の部屋にやってくる。しかし、明石の姫君は紫の上のもとを訪れており、留守であった。夕霧は明石の姫君を待ちながら、雲居雁のもとへ手紙を書く。手紙について女房たちと会話する中で、「かやうの人々にも、言少なに見えて、心解くべくももてなさず、いとすくすくしう気高し」とあり、

女房たちにも言葉少なに應對して、気をゆるすようにもふるまわず、実にきまじめに気品が高い人物である、と第三者の視点から描かれている。紫の上に思い乱れていた夕霧の姿は、もはや存在しない。そこへ、紫の上のもとに行っていた明石の姫君が戻ってくる。

渡されたまふとて、人々うちそよめき、几帳ひきなほしなどす。見つる花の顔ども、思ひくらべまほしくて、例はものゆかしからぬ心地に、あながちに妻戸の御簾をひき着て、几帳の綻びより見れば、物のそばよりただ這いわたりたまふほどぞ、ふとうち見えたる。人の繁くまがへば、何のあやめも見えぬほどに、いと心もとなし。薄色の御衣に、髪はまだ丈にははづれたる末のひき広げたるやうにて、いと細く小さくらうたげに心苦し。一昨年ばかりはたまさかにもほの見たてまつりしに、またこよなく生ひまさりたまふなめりかし、まして盛りいかならむ、と思ふ。かの見つるさきざき、桜、山吹といはば、これは藤の花とやいふべからむ、木高き木より咲きかかりて、風になびきたるにほひは、かくぞあるかし、と思ひよへらる。(③二八四〜二八五頁)

ここでは、垣間見を中断させるものとして重要な役割を担っていた、野分と源氏の存在は見られない。この垣

間見は、玉鬘の垣間見と同様、「見つる花の顔ども、思ひくらべまほしくて」という動機のもと、夕霧が自分の意思で行動して起こったものなのである。

これらのことから、紫の上の垣間見場面で、夕霧の行動を誘発していた野分と源氏の存在は、玉鬘、明石の姫君の垣間見場面ではその役割が希薄になっているか、あるいは消失しているということがわかる。玉鬘の垣間見場面では、源氏の存在が残ってはいるものの、その役割は変化しており、「恐ろし」と感じつつも、垣間見ようと行動する夕霧の積極性を際立たせるものとなっていると考えられる。

### 三・二 冷静な視点

玉鬘の垣間見場面は、夕霧の行動、心理描写が多くあるので、特に「ちちらの垣間見に注目して論を進めていく。夕霧の眼は、源氏と玉鬘の戯れから、玉鬘のみを映すようになり、玉鬘の容姿は次のように語られる。

昨日見し御けはひには、け劣りたれど、見るに笑ま  
るさまは、立ちも並びぬべく見ゆる。八重山吹の  
咲き乱れたる盛りに露かかれる夕映えぞ、ふと思ひ  
出でらるる。をりにあはぬよそへなれど、なほうち  
おほゆるやうよ。花は限りこそあれ、そそけたる薬  
などもまじるかし、人の御容貌のよきは、たとへむ

方なきものなりけり。

(③二八〇頁)

ここで用いられている「八重山吹の咲き乱れたる盛り  
に露かかれる夕映え」の比喻が、紫の上との対比になっ  
ていることは明白であるが、そこには看過することので  
きない夕霧の視点の変化が存在している。夕霧は紫の上  
を権桜、玉鬘を八重山吹と、春の花に喩えているのだが、  
野分巻の季節は秋である。紫の上の垣間見場面では、そ  
の矛盾に対する言及はなかったのだが、玉鬘の垣間見で  
は、わざわざ「をりにあはぬよそへなれど、なほうちお  
ぼゆるやうよ」とことわっている。これは当然、夕霧が  
観察者としての眼を持っているということになるのだが、  
紫の上の垣間見に没頭し、感覚的に紫の上を権桜という  
花に喩えたときは異なり、紫の上との対比、さらに花  
に関して季節のずれを自覚しているのは、夕霧の冷静さ  
の表れであると言えよう。この視点は明石の姫君の垣間  
見場面にも受け継がれ、明石の姫君の容姿は「かの見つ  
るさぎさぎの、桜、山吹といはば、これは藤の花とやい  
ふべからむ、木高き木より咲きかかりて、風になびきた  
るにほひは、かくぞあるかし、と思ひよへらる」と描写  
されている。吉海は「夕霧は紫の上を「権桜」に、玉鬘  
を「八重山吹」に、そして明石姫君を「藤の花」にと、  
見事なまでに対照的かつ律儀に植物に喩えている」と述

べ、「野分の垣間見は、案外醒めた垣間見ではないだろ  
うか」のと指摘している。先に取り上げた紫の上の垣間見  
は、とても醒めているとは思えないが、玉鬘、明石の姫  
君の垣間見はそう判断できるのではないだろうか。

その夕霧の冷静さは、玉鬘の垣間見場面の最後にも表  
れている。夕霧は玉鬘の容貌を称賛した後、再び源氏を  
視界に入れる。

御前に人も出で来ず、いとこまやかにうちささめき  
語らひきこえたまふに、いかがあらむ、まめだちて  
ぞ立ちたまふ。女君、

吹きみだる風のけしきに女郎花しをれしぬべ  
き心地こそすれ

くはしくも聞こえぬに、うち誦じたまふをほの聞く  
に、憎きものをかしければ、なほ見はてまほしけ  
れど、近かりけりと見えたてまつらじと思ひて、立  
ち去りぬ。

(③二八〇頁)

夕霧は、見届けたいと思いつつも、自分が近くにいたこ  
とを見つかるまいと思ひ、源氏の返歌を耳にする前に立  
ち去っている。源氏の存在を想起、あるいは意識したと  
同時に「立ち去る」「立ち退く」という行動に移っていた  
紫の上の垣間見場面とは異なり、立ち去らねば見つかる  
という状況ではないが、用心して立ち去るのだ。このこ

とからも、夕霧は、冷静な視点を獲得していると言えよう。

### 三・三 反乱的な視点

夕霧は、源氏と玉鬘の様子を見て、次のような感想を抱いている。

柱がくれにすこし側みたまへりつるを引き寄せたまへるに、御髪のなみ寄りて、はらはらとこぼれかかりたるほど、女もいとむつかしく苦しと思ひたまへる気色ながら、さすがにいとなごやかなるさまして寄りかかりたまへるは、ことと馴れ馴れしきにこそあめれ、いであなうたて、いかなることにかあらむ、思ひよらぬ限なくおほしける御心にて、もとより見馴れ生ほしたてたまはぬは、かかる御思ひ添ひたまへるなめり。むべなりけりや、あな疎ましとも思ふ心も恥づかし。(③二七九頁)

紫の上の垣間見場面で、源氏は「親ともおぼえず、若くきよげになまめきて、いみじき御容貌の盛りなり」(③二六六頁)と称賛され、垣間見場面に「美」を加えていた。しかし、玉鬘の垣間見場面では「いであなうたて」、「あな疎まし」という嫌悪感を夕霧に抱かせる者となつてゐる。夕霧は、玉鬘を自分の腹違いの姉だと思つており、源氏の性格と玉鬘の生い立ちの両面から、源氏の行為を

無理もないことだと納得しているのだが、感情的には許せないのである。そして、そういつたことに考えを巡らす自分の心までもきまり悪く感じている。源氏と玉鬘の近親相姦的な戯れに對して、これ以上言及することはないので、垣間見た源氏の姿に否定的な印象を抱いているのは、紫の上の垣間見場面との大きな相違点であろう。

この垣間見の嫌悪感から生まれた夕霧の視点は、玉鬘と源氏の關係に疑問を抱く夕霧の心底に潜んでいたが、藤袴巻でついに表層に上つてくる。

藤袴巻で、源氏の使者として玉鬘を訪れた後、夕霧は源氏のもとに參上する。秋好中宮や弘徽殿の女御がいる冷泉帝後宮に、玉鬘を向侍として出仕させても、それらの女君と肩を並べて寵愛を受けるのは難しく、混乱を引き起こしかねないとの懸念を伝える。源氏は一般論と虚構を織り交ぜながら弁解するのだが、それでもなお夕霧は切り込んでいく。

「内々にも、やむごとなきこれかれ年ごろを經てものしたまへば、えその筋の人数にはものしたまはで、棄てがてらにかく譲りつけ、おほぞうの官仕の筋に領ぜんと思しおきつる、いと賢くかどあることなりとなんよるこび申されけると、たしかに人の語り申しはべりしなり」(③三三六〜三三七頁)

内大臣が話した確かな情報とし、冷泉帝のもとへ向侍として出させながら、秘密の男女關係をこれからも維持していくつもりなのだろうと、源氏の公言できない意圖に迫っているのである。源氏は常夏巻で、「さてここながらかしづき据ゑて、さるべきをりにはかなくうち忍び、ものをも聞こえて慰みなむや」(②二三五頁)、つまり玉鬘を六条院に住まわせたまま夫を通わせ、夫の目を盗んで玉鬘と情を交わしたいと考えていたのだが、このことを看過されていたのかと、不快にも恐ろしく感じる。

夕霧は、玉鬘を向侍として出させる意圖を疑い、藤袴巻での「この官仕を、おほかたにしも思し放たじかし、さばかり見どころある御あはひどもにて、をかしきさまなることのわづらはしき、はた、かならず出で来なんかし」(②三三〇頁)と、冷泉帝後宮だけでなく、六条院の人間關係にも混乱が生まれてしまうに違いないという、確信めいた推測も手伝って、この発言をしたと考えられる。夕霧が、源氏の玉鬘への執着を見抜いているのは、垣間見したときの源氏の様子が原因である。さらに、この場面は、ほとんどが夕霧と源氏の対話によって進行している。玉鬘の出仕について語っていた源氏を引き戻し、夕霧は世間の噂、髭黒大将、内大臣のことを根拠に、源氏と玉鬘の仲について問いつめていく。このとき、対

話の主導権は夕霧が握っており、源氏の姿は、自らの立場を守る者として描写されている。源氏を鋭く追及していく、最後まで疑いを捨てない夕霧の姿の根底には、玉鬘の垣間見場面で生まれた視点が存在している。

源氏に対するこの夕霧の行動は、玉鬘の垣間見場面で抱いた嫌悪感や否定的な印象を底流させている。この点から、夕霧は玉鬘の垣間見場面で、反乱的視点を獲得したと言うことができるのではないだろうか。この視点は、源氏の「美」への称賛ではなく、「いであなうたて」、「あな疎まし」という嫌悪感から生まれたものであるから、当然、六条院の秩序を脅かすものであるが、本稿の二で述べたそれとは、性質が異なる。紫の上の垣間見場面の夕霧の視点は、野分によって得られ、さらにそれは源氏の支配下、管理下に位置しているものであったが、この垣間見場面の視点は、夕霧が自主的に行動し、自ら作り出したものだからである。さらに源氏に対する嫌悪感を伴っていることから、もはやその支配・管理下には位置していないとも言える。玉鬘の垣間見場面で生まれた夕霧の反乱的視点は、実際の行動に結び付いている点、また源氏の力の及ばないところに据えられている点から、紫の上の垣間見場面の視点到増して、源氏にとって脅威となっていると考えられる。

### 三・四 夕霧の役割

玉鬘、また明石の姫君の垣間見場面の夕霧の役割は、紫の上の垣間見場面のそれとは大きく変化しているといえよう。先の垣間見場面で大らかな影響を及ぼしていた野分、源氏という二つの存在は、もはや夕霧の行動を左右するものにはなっていない。玉鬘、明石の姫君の垣間見場面の、自分の意思に基づく行動力や自制心を得た夕霧の姿は、六条院の男主人としての源氏の力が弱体化し、そのために六条院の管理・支配といった秩序が、乱れ始めていることを表しているのではないだろうか。

さらに、玉鬘の垣間見場面の夕霧は、より大きな役割を担っている。伊藤博は紫の上を垣間見て、野分の晩に思い悩む夕霧の姿を、「光源氏的世界に対して、ある反乱的座標をすら抱え込んだ存在が設定され」<sup>⑩</sup>たと指摘しているが、これは、玉鬘の垣間見場面を設定されたと見るべきではないだろうか。玉鬘の垣間見場面では、夕霧は冷静な思考と冷静な視点に加え、源氏と玉鬘の戯れを目にするので、源氏に対する嫌悪感、そこから反乱的な視点をも獲得していると言うことができるためである。この二つの垣間見を通して、夕霧は、六条院世界における脅威として位置付けられたのではないだろうか。

### 四 野分巻の垣間見における夕霧

平安朝の物語文学の中で、男性が女性を垣間見る場面は、一般に恋物語展開の発端として位置付けられているが、野分巻の夕霧の垣間見場面は、恋物語展開に繋がっていないことから、夕霧は「見る人」つまり視点人物という位置にとどまるとされてきた。しかし、夕霧の「見る」という行為が、そもそもどのようなようにして生まれたのか、またその視点の性質の変化に着目することで、夕霧の新たな役割を見出すことができた。

まず、紫の上の垣間見では、野分、源氏という二つの存在が大らかな影響を及ぼしていた。夕霧の視点は野分から得たものであり、また垣間見が成立したのは、野分による現象が重なったためであった。そしてその夕霧の視点を閉じていくのが源氏である。六条院の人工的な自然を崩壊させる野分の存在は、一見そのまま六条院世界を崩壊させるものとして機能しているようだが、その役割は果たされていない。野分が夕霧の視点を作り出し、それが源氏によって奪われていくことで、源氏は野分に勝る力を付加されていることになるだろう。このことから、紫の上の垣間見場面では、夕霧は六条院世界がまだ崩壊しておらず、源氏が野分という自然そのものさえも凌ぐ

存在だと印象付けるといふ役割を持つている。

続く玉鬘、明石の姫君の垣間見場面では、野分と源氏の存在にはほとんど、あるいは全く依存せず、夕霧は自ら行動するようになっていく。さらに、どちらも紫の上の垣間見にある花の比喻を踏襲していることから、様式を意識する冷静さが生まれているといえよう。また、玉鬘の垣間見場面に注目していくと、夕霧は源氏に対して反乱的視点を抱き、それが後の藤袴巻に影響していることがわかる。それによって、玉鬘、明石の姫君の垣間見場面での夕霧は、源氏の支配・管理の屈かぬ視点を獲得し、六条院世界における脅威という役割を持つようになっていくのである。

これらの役割から、夕霧は野分巻の垣間見全体を通して、六条院における源氏の力の弱さを表現し、またそれと同時に源氏の支配・管理下から脱し、自立した存在として位置付けられているとすることができるとはならないだろうか。後者によって、夕霧は六条院世界や源氏の存在を、肯定的にも批判的にも見ることでできるようになるため、客観的に捉えるという役割も得ていると理解できる。

【注】

① 吉海直人「『垣間見』の総合分析」、『『垣間見』る源氏物語 紫

式部の手法を解析する』笠間書院、二〇〇八)

② 今井源衛「物語構成上の一手法―かいま見について―」、『王朝文学の研究』角川書店、一九七〇)

③ 本論で用いる『源氏物語』の本文は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『新編日本古典文学全集 源氏物語①②③』(小学館、一九九四・一九九六)による。本文掲載の際、同書の巻と頁を示す。

④ 高橋亨「可能態の物語の構造―六条院物語の反世界」、『源氏物語の対位法』東京大学出版会、一九八二)

⑤ 林田孝和・植田恭代・竹内正彦・原岡文字・針本正行・吉井美弥子編『源氏物語事典』(大和書房、二〇〇二)の「まめ」(塚原明弘)に、「恋愛に限らず、包括的に「まめ」評価される人物が、「まめ人」である」と位置付けられている。また、鈴木日出男編『源氏物語ハンドブック』(三省堂、一九九八)の「まめ」(鈴木日出男)に、『源氏物語』で「まめ人」とされる人物の筆頭は、夕霧である」との指摘がある。

⑥ 伊藤博「『野分』の後―源氏物語第二部への胎動」、『源氏物語の原点』一九八〇、明治書院)

⑦ 注①に同じ。

⑧ 注⑥に同じ。

(ひ)のもと めぐみ 飯田市立旭ヶ丘中学校教諭)